

年間第二十主日（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読：マタイ 15：21 - 28

カナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、私を憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています。」と叫んだ。弟子たちがこの女を追い払いたいですが、イエスは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていなくて、子供たちのパンを取って子犬にやっつけてはいけなとお答えになった。女は言った。「主よ、子犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」イエスは彼女の信仰が立派だとおっしゃいました。結局、彼女の願い通りになるように、娘の病気を癒された。

（二）カテキズムの響き：『カトリック教会のカテキズム』の番号 #161、439、1504 - 1505、2610；YOUCAT #71 - 72、135 - 136

多くのユダヤ人、並びに彼らと希望をともにする異邦人は、イエスのうちに、神からイスラエルに約束されたダビデの子であるメシアの基本的特徴、さらにメシアの称号を認めました。即ち、イエスを私たちの救いのために遣わしてくださった神を信じることは、救いを得るために必要です。このような信仰なしに永遠の命を得ることは不可能でしょう。信じる者には何でもでき、祈り求めるものはすべてすでに得られるようにと教えられます。だから、イエスは、カナンの女の立派な信仰を前にして感嘆なさいます。悪霊にひどく苦しめられる状況におけるカナンの女の娘の信仰のように、病人に対して、イエスはしばしば信じることを求めます。病人も病気が癒されるようにイエスに触れようとします。多くの苦しみに心を打たれたイエスは、病人が触れるままにさせておかれるだけではなく、私たちの罪を負い、人間の弱さを担ったとある通り、人々の苦しみを自分のものとなさいます。十字架上で、キリストは悪のすべての重荷をご自分の上に背負われ、世の罪を取り除かれました。病気は世の罪の一つの結果にほかなりません。病気を癒すことは、神の国の到来のしるしでした。キリストは十字架上での受難と死に対する勝利を通して、世界の贖いをもたらします。今も、キリストは秘跡を通して、私たちに触れ、私たちを癒し続けながら、キリストの贖いの苦しみに私たちを一致させることができるようになったのです。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

#81 イエスという名は、神は救うという意味をもっています。

#82 キリストと呼ばれるのは、ギリシア語です。

ベブライ語でメシアは油を注がれた者を意味します。

#83 主という称号は、通常、自然、悪霊、罪、死に対する至高の主権者である神を指します。

#107 イエスによって告知され、実現される神の国に与るよう招かれている。

314 すべての人を招いて、謙虚な心で、御父の限りない慈しみを受け入れるよう呼ばれています。さらに、病気に悩む人の癒しは、神の国が罪と苦しみと死に対する勝利が到来したことのはっきりとしたしるしです。

最後の祈り：主よ、世界の災害と苦しみ人を憐れんでください。弱さと無力さを感じるときにも、神の救いを信じ続けることができますように。また、他人の求める人々の声にこたえて働くことができますように。